

『Audition ～君がくれた約束～』

作・演出 春田鮎



登場人物

エマ：女優を目指す明るく元気な女の子

ジェット：ギターを愛するロック少女

ドラマ：脚本家志望のマジメ女子

サンバ：陽気な南国生まれのダンサー

バラード：クールな北国育ちのソプラノ歌手

レインボー：大道芸人

ヘルプ：Auditionの女性オーナー

セレブ：裕福な上にとびきりの美貌と才能の持ち主

ジャズ：ブロンズウェイで人気のダンサー兼振付師

プリンセス：歌や芝居が大好きなハンデキャップのある少女

■ 第一幕

Auditionのフレンズルーム。

ギターをつま弾くジェット。

机で戯曲をしたためるドラマ。

ステップの練習中のサンバ。

退屈をかき消すように歌い出すジェット。

次々に歌に参加するAuditionの住人達。

M 『Bad time, Good time』

ジャグリングをしながら帰ってくるレインボー。

しつとりと歌いながら帰ってくるバラード。

怒った様子で入ってくるオーナーのヘルプ。

エレガントに現れるセレブ。

ジャズに手を取られ嬉しそうに遊びに来た盲目のプリンセス。

プリンセス「ああ、楽しい！やっぱ音楽は最高！ね？そうでしょ、姉さん！」

ジャズ「そうね。どう、みんな、上手くやってる？」

ドラマ「そこそこ普通に」

バラード「可もなく不可もなく」

サンバ「適当に遊んで」

レインボー「適当にがんばって」

ジェット「毎日楽しくやってる」

セレブ「ふん、あいかわらずね」

ジェット「何がよ、文句ある？」

セレブ「文句なんかないけど、私の邪魔はしないでね」

サンバ「邪魔？私たち、人の邪魔なんかしたこと」

セレブ「目障りなのよ。やる気も才能も中途半端な人間に目の前をうろちよろされると」

ジェット「なんですって！？」

レインボー「だったら来なければいいじゃない？何の用？どうしてわざわざ」

バラード「そうよセレブ、あなたの部屋はたしか、ピースフルパークを見下ろせる高級ア

パルトメントでしょ？」

ヘルプ「引っ越してきたのよ。一か月だけね」

ジェット「引っ越してきた？」

ドラマ「一か月だけ？」

セレブ「そう。今住んでる部屋を改装することになって、その間だけ仕方なく」

サンバ「仕方ないだなんて、なんだか住んでる私たちを馬鹿にしてない？」

セレブ「してるわよ」

ジェット「あんた！」

ジャズ「ジャット。セレブも、そんな言い方よくないわ」

セレブ「ふん・・・今日はミス・ジャズの顔に免じて許してあげる。だけどこれだけは言っておくわ」

ドラマ「なによ」

セレブ「オーディションなんて名前のとこに住んで、オーディションばかり受け続けて、本気でのし上がろうとしないあなたたちの気がしれない。そうやっていつまでも夢を追ってればいいのよ。わたしは一月経ったらこんなところさっさと出て行くから。縁起が悪いっつらないわ。ということ、それまでどうぞよろしく。ふん！」

出ていくセレブ。

レインボー「相変わらず嫌な感じ！ちよっとお金持ちで、ちよっと歌もお芝居も上手で、ちよっと人より綺麗で・・・」

ドラマ「あんた、めっちゃめっちゃ褒めてない？」

ジェット「ヘルプさん、どうしてあんなやつをここに入れたの？」

ヘルプ「お父上に直々に頼まれたのよ」

バラード「お父上ってあのメディア王のサザビー・ゴールド氏でしょ？知り合いなの？」

ヘルプ「ええ、少しね。彼も昔、売れないトランペッターだったのよ。そして私はそのピアノ弾き」

サンバー・ドラマ・バラード「えー!？」

ジャズ「そんな話、初めて聞いたわ」

ヘルプ「ふふふ、まあその後はエンターテイメント界を中心に実業家に転身して大成功したんだけど。今の彼女の部屋があるビルも彼の所有で、今度色々リニューアルするから、一ヶ月だけって約束で預かったの。それに」

サンバ「それに？」

ヘルプ「娘に友達が作れないかって」

ジェット「友達？」

ドラマ「やだやだ、あんな人」

ヘルプ「ドラマ、最初からそんなこと言わないで。ね、サンバ？」

サンバ「えー？いくら私でもそれはちよっと」

プリンセス「わたし、なってもいいわよ」

バラード「プリンセス」

プリンセス「私はこの住人じゃないけど、このみんな大好きだし、きつと彼女だって」

ここに住んだら気持ちも変わって」

ジェット「変わらないわよ」

ジャズ「ジェット？」

ジェット「人間、そんなに簡単に変わりっこない。嫌な奴はやっぱり嫌な奴よ。ふん！」

自室に戻るジェット。

レインボー「あ、ジョット・・・行っちゃった」

バラード「どうしたんだろ？」

ドラマ「よっぽど嫌いなね、お金持ちのお嬢様が」

ヘルプ「だけど、久しぶりね、ジャズ。海外遠征はどうだった？」

ジャズ「ええ、すごい盛り上がりだったわ。ドイツ、フランス、イタリア、イギリス、そしてモロッコ、サウジアラビア、どこ会場もたくさんの方が大きな拍手と歓声で称えてくれた。芸術に、音楽に国境はないって実感できる素晴らしいツアーだった」

ヘルプ「それはいい経験だったわね。うらやましい」

サンバ「いいなあ。ジャズもここに住んでいたんでしょ？」

ジャズ「そうよ。一流のダンサーになるっていう夢を追いかけて、デリーからニューヘイブンに来て初めて住んだのがこのAudition。最初の頃はそりゃあ貧乏でね、三日先までひとつのパンしかなかったり、バス代がなくてスクールまで2時間以上も歩いて往復したりね(笑)」

バラード「それが今では世界ツアーかあ、素敵ねー」

レインボー「どうしてここを選んだんですか？」

ジャズ「やっぱり名前よ」

ドラマ「同じだわ」

バラード「私も」

サンバ「たくさん受けたの？オーディション」

ジャズ「そりゃもう、数えきれないくらい」

サンバ「へー・・・あの、オーディションのコツって何かありますか？良かったら教えて」

ジャズ「そうね・・・慣れないことかな」

ドラマ「慣れないこと？」

ジャズ「うん。同じようなオーディションを受け続けてたある日、知らないうちに昨日の自分と何も変わって自分に気が付いたの。踊り方も、質問への答えも、そして気持ちも」

サンバ「はぁ・・・」

バラード「心当たりありって顔ね」

サンバ「だって・・・同じプロデューサーだったのよ。2回続いて・・・」

プリンセス「目をつぶったらどう？」

ヘルプ「あら、面白い事言うのね、プリンセス。続けて」

プリンセス「つまり、目で見えるからいけないのよ。耳と心だけで世界を感じると、同じ状況なんて本当は一瞬だってありはしないの。同じ気がしてるのは錯覚。ちゃんと向き合えばいつでも世界は新鮮なのよ」

M 『世界はいつでも新しい』

拍手をするヘルプとジャズ。

サンバ「ありがとう、プリンセス。私、試してみる」

バラード「初めから最後までつぶってちゃ駄目よ」

ドラマ「そうよ、柱に頭ぶつけるだけよ」

大笑いする皆。

■第二幕

次の日。チャイムの音がする。

A u d i t i o n を初めて訪れたエマ。

誰も出てこないので勝手に入ってくるエマ。

エマ「ハロー・・・誰もいないのかな。早く来すぎたかな・・・さて、どうしよう・・・」

偶然、出かけようとしているセレブと鉢合わせする。

エマ「あ、よかった。ハロー、この人よね？助かったー、私はエマ。本当はエマニエルなんだけど、名前が色っぽすぎて似合わないからみんなエマ、エマって。あ、あなた名前は？あ、ちよつと待って当ててみる！私、超能力があるんだ、名前当てるだけの超能力！あはははは、笑っちゃうでしょ！？えーと、綺麗で高そうな服に育ちの良さそうな涼しい目・・・そうだ！セレブ！セレブでしょ！ピンポーン！どう？違う？当たった？・・・ねえ？」

セレブ「・・・どいて。レッスンに遅れちゃう」

エマ「あ、ごめんなさい」

セレブ「ふん！」

出ていくセレブ。

エマ「いつてらっしやい・・・って、見送っちゃったらだめじゃん！どうしようかな」

後から近づくレインボー。

レインボー「すごい！超能力者始めて見た！弟子にしてください」

エマ「わ、わ、わ、わ・・・びっくりした。良かった、人がいた」

レインボー「どうしてわかったの？どうやったの？教えて！お願い！」

エマ「え？何が？何の事？」

レインボー「今当ててたじゃない、名前！初めてあった人の名前当てられる超能力ってすごい狭いパワーだね」

エマ「うそ・・・当たったの！？あの人、セレブ？本当に？すごい！私、すごい！」

レインボー「なに、偶然なの？なーんだ、つまんないの。大道芸の技に教えてもらおうと思っただのに」

エマ「あら、あなた大道芸人なの？」

レインボー「そう。まだまだ駆け出しだけど、いつかアップルシアターでショーをやるのが夢なの。で、あなたは何の用？」

エマ「あ、忘れてた！実は私」

ガヤガヤとフレンズルームに入ってくるジェットたち。

ジェット「うん？・・・あんた誰？」

エマ「どーも。今日からここに引っ越してきたエマよ。よろしく」

レインボー「そうだったんだ」

ドラマ「ああ、オーナーのヘルプさんが言ってたわね」

ジェットに握手を求めるエマ。無視してギターをつま弾きはじめるジェット。

サンバ「ハイ、私はサンバ。ダンサー志望よ。あなたは？」

エマ「私？私はね、女優志望」

ジェット「女優？へー、あんたがね、ふーん」

エマ「なによ、人のことじろじろ見て。何か問題ある？」

ジェット「別に」

小馬鹿にした風のジェットをにらむエマ。

レインボー「ねえ、この子凄いだよ。初めてあった人の名前当てられるの」

エマ「あ、それはさつきはたまたま」

ドラマ「面白そう！じゃあ、私は？」

エマ「え？えっと・・・ジャスミン！」

ドラマ「ブツブー！素敵な名前だけどハズレ。私はドラマ、脚本家を目指してるの」
バラード「バラードよ。オペラ歌手を目指して勉強中。それで？あなたの部屋は？」

エマ「えっと、たしか303」

サンバ「イエイ、私の隣だ」

エマ「本当？よろしく、サンバ」

ドラマ「私は205」

バラード「206」

レインボー「301」

みんなと順番に握手をするエマ。

それを見て握手をエマに求めるジェット。

ジェット「(咳払い) あたしはジェット。ギタリストよ。204」

エマ「ふふふ、よろしく」

握手を交わすジェットとエマ。

エマ「これで全員かしら？」

レインボー「ううん、ほらさっき出て行った」

ドラマ「セレブか」

エマ「私が名前当てた人だ」

ジェット「あんなやつのはいいからさ、いっちょ歓迎のパーティーといこうか？」

サンバ・ドラマ・バラード・レインボー「賛成！」

M 『Audition』

ジェット「やるじゃない。それで狙ってる作品とかあるの？」

エマ「もちろん！ブロンズウェイミュージカルの『I Can, t Stop To Love You, よー』」

■第三幕

【I Can, t Stop To Love You】オーディション会場

エマ「あー、緊張する・・・あ、もう一度セリフの確認しておこうと・・・」

セレブ「あら、あなたも受けるの？」

エマ「・・・あ！昨日Auditionで会った、えっと・・・セレブ！そうよね？」

セレブ「そうだけど・・・あなたその格好で受けるの？」

エマ「え？・・・おかしいかな？一応一番のお気に入りに入り着てきたんだけど」

セレブ「ははははは！いくら気に入ってたって、遊園地に行くんじゃないんだから。ださすぎない？」

エマ「そうかな？・・・でも、洋服で選ばれるわけじゃないだし」

セレブ「甘いわね」

エマ「甘い？・・・私のどこが甘いつていうのよ」

セレブ「世界は自分中心に回ってるとでも思ってるの？」

エマ「そんなこと思っていないけど・・・」

セレブ「あなたみたいな一見ポジティブそうな人はね、上手いかなかった事や、人に指摘された事なんかを自分の理屈をつけて認めようとしなのよ。そのくせろくに反省もしないで、さあ次！次！なんて前に進んでる気になってる。違う？」

エマ「んー・・・わかんない！」

セレブ「・・・ふん、もういいわ」

エマ「え？ちよつと、もつと詳しく教えてよ」

スタッフが二人の名前を呼ぶ。

スタッフ声「次、セレブ・ゴールド、エマ・ストリップ」

セレブ・エマ「はい」

スタッフ声「入って」

オーディションルーム。

プロデューサー声「それじゃあ早速、演技を見せてちょうだい。まずはセレブ・ゴールド・・・まあ、あなた、あのサザビー・ゴールド氏の娘さんなの」

セレブ「はい、そうです」

プロデューサー声「ふーん・・・では始めて」

セレブ「はい。」

【セリフ】湖に落ちた雪は、いつまでが雪なんだろう・・・私も雪みたいに、この湖に融けてしまいたい・・・全部融けてしまって、私たちが天国に持ってっちゃえば、ママはこのまま、あの街で暮らしていけるかな？・・・眠くなってきたわ・・・あなたの匂い・・・大好きよ・・・」

プロデューサー声「すばらしいわ、セレブ。どうもありがとう。それじゃ続いて、エマ、始めて」

エマ「はい！」

【セリフ】湖に落ちた雪は、いつまでが雪なんだろう・・・私も雪みたいに、この湖に融けて」

プロデューサー声「OK、いいわ。お疲れ様」

エマ「え？でもまだ」

プロデューサー声「エマ、終了よ」

エマ「・・・はい」

ダンススタジオ。

ジャズにコーチを受けるサンバ、レインボー、バラード、そしてエマ。

ジャズ「はい、10分休憩よ」

サンバ「ふー！やっぱりジャズのレッスンは最高！」

バラード「本当！月一回だけどジャズにダンス習い始めて、リズム感が良くなったって声楽の先生にも褒められるようになったわ」

ジャズ「本当はもつと見てあげたいんだけど」

レインボー「いえいえそんな、Auditionの後輩ということで無理を聞いてもらってるだけで、ね？みんな」

サンバ「そうそう！ジャズ、いつも」

みんな「ありがとうございます！」

ジャズ「どういたしまして」

休憩に入るみんな。

様子がおかしいエマ。

ジャズ「エマ？」

エマ「・・・あ、はい」

ジャズ「何かあった？」

エマ「・・・昨日、オーディションがあつて・・・それで」

ジャズ「それで？」

エマ「・・・セリフの途中で、止められちゃったの。私はまだお芝居をしていたんだけど」

サンバ「あるあるじゃない？」

エマ「え？あるある？」

サンバ「そう、よくあることだと思っわよ。私だって何度も踊ってる途中で帰されたもの。ひどい時なんて、顔見た途端に“はい、おつかれさま”って、あんまりじゃない？」

ジャズ「エマ、そんなことぐらい何よ。この先もつとつと苦しいことはたくさんあるわ」

エマ「分かつてる。だけど、私の何がいけなかったのかが分からなくて・・・それで・・・」

昨日、セレブに言われたの」

サンバ「セレブ？一緒だったの？オーディション」

エマ「(うなずき) 始まる前に言われたの、あなたみたいな人間は失敗したとき何がいけなかったか反省もしないでただただ前向きに生きようとしてるだけだって・・・ドキツとした・・・当たってるなって・・・だから一生懸命考えてみたんだけど、その時のオーディションで何がいけなかったのか分からなくて・・・それで・・・」

バラード「確かにいるわよね、テンションだけの人って」

サンバ「なんでこっち見るのよ!？」

エマ「昨日の夜も、私はどうして女優になりたいんだろう、お芝居や舞台に立つことにどんな意味があるんだろう・・・なんて考えちゃって、全然眠れなかったわ」

サンバ「馬鹿ねえ、好きだからやるんじゃない。私はダンスが大好き!踊りの無い人生なんて考えられない」

バラード「私もそうかな。歌が好き。それだけなのかもしれないわね。歌ってるときが一番幸せ。それだけじゃいけないのかしら?ねえ、ジャズ?」

ジャズ「そうね・・・私もそれでいいと思うわ。好きだからやってる。私もみんなと同じよ。ただ、私はいつからかお客様のためにステージに立つようになったわ。ううん、違う、お客様がいてくれるから私はステージに立ってるんだって感じるようになった」

エマ「お客様がいてくれるからステージに立てる・・・」

ジャズ「エマ、反省や自己採点はもちろん大切よ。その時には分からないことも多いわ。だけど考え続けていればいつか分かる日が来る。あの日の自分はあるべきがいけなかったんだ、あれが足りなかったんだってね。だけど、好きだという気持ちを疑う必要はないわ。無くても生きていけるけれど、無かったらつまらないのが芸術。私たちはラッキーなのよ、好きな事に会えたんだから」

M 『I , m L u c k y G i r l』

■ 第四幕

A u d i t i o n のフレンズルーム。

いつものようにギターをつま弾くジェット。

執筆中のドラマ。点字で本を読むプリンセス。

ドラマ「うーん、だめだわ」

ジェット「めずらしいじゃない、イラついた声出して」

ドラマ「ごめんごめん・・・はあ」

ジェット「何よ、どうしたの?」

ドラマ「それがね、なかなかうまくいかなくて」

ジェット「なに?脚本?」

ドラマ「そう。明後日締切の脚本コンテストがあるんだけど、どうしてもうまく進まない

ところがあつて」

ジェット「どんな話？」

ドラマ「都会から遠く離れた田舎町で暮らす少女が、夢を追いかけて都会に出て来るの。そこで色々なことに悩んだり苦しんだり」

ジェット「タイトルは？」

ドラマ「うふふ・・・君がくれた約束」

ジェット「へー、面白そう」

ドラマ「そうだ、ジェット、あなたこのセリフ読んでみてくれない？」

ジェット「え？私が？やだよだ、私は音楽専門で、お芝居だけは苦手なのよ」

ドラマ「そう言わないで協力してよ。人の声で聞いたら物語をリアルに感じられるかもしれないじゃない。ほら、ここ、下宿先が火事になって逃げるシーンなんだけど、今一つリアリティが」

ジェット「えー、エマとかが帰ってくるの待ってたら？」

ドラマ「いますぐイメージをつかみたいのよ！創作っていうのは待ったなしなの！いいからいいから、はい、お願いします」

ジェット「ははは、それならプリンセスのがいいんじゃない？私よりきつと」

ドラマ「そうか！二人でやればもつとリアルね。プリンセス！」

プリンセス「いいわよ」

ドラマ「聞いてた？」

プリンセス「うん。でも私、点字じゃないと読めないわよ」

ドラマ「じゃあ私が一回読むから、聞いていてくれる？」

プリンセス「分かったわ」

ドラマ「じゃあ、行くわよ。ジェット、準備いい？」

ジェット「もう・・・はい、どうぞ」

ドラマ「私はアニタを読むから（咳払い）

早く逃げなくちゃ！さ、ミーナ、急いで！

・・・どうしたの？次、ジェット、あなたよ、ミーナってところ読んで・・・何？」

ジェット「いや、めちやくちや下手だなと思って」

ドラマ「ちよっと！私は書くのが専門だからいいのよ！お願いだからまじめにやって！」

ジェット「笑）ごめんごめん」

ドラマ「じゃあ最初から行くわよ」

《セリフ》アニタ・・・ドラマ ミーナ・・・ジェット

アニタ『早く逃げなくちゃ！さ、ミーナ、急いで！』

ミーナ『手を放して！私なんてもどきどきなってもいいわ！』

アニタ『ミーナ・・・』

ミーナ『いい気味でしょ？私はまだ終わりよ！私のことなんてみんなとつくに忘れてる！』
アニタ『馬鹿言わないで！ミーナ、いつも言ってたじゃない。』私はベストを尽くしたいだけ』って。それを聞いて私も、今自分にできることにベストを尽くそうって決めたの。だからあなたも、ベストを尽くしてよ。お願い・・・』

ミーナ 『アニタ・・・私、あなたを誤解してた・・・今まで・・・ごめんなさい！』
拍手をするプリンセス。

プリンセス「素敵！私もやりたい！」

ドラマ「オッケー！じゃあもう一度だけ」

プリンセス「大丈夫、覚えたわ」

ドラマ「本当に？」

プリンセス「ええ」

ジェット「じゃあ、やろうか？」

ドラマ「うん。はい、本番！ヨーイ・・・アクション！」

《セリフ》アニタ・プリンセス ミーナ・ジェット

アニタ『早く逃げなくちゃ！さ、ミーナ、急いで！』

ミーナ『手を放して！私なんてもうどうなってもいい！』

アニタ『ミーナ・・・』

ミーナ『いい気味でしょ？私はまだ終わりよ！私のことなんてみんなとつくに忘れてる！』
アニタ『馬鹿言わないで！ミーナ、いつも言ってたじゃない。』私はベストを尽くしたいだけ』って。それを聞いて私も、今自分にできることにベストを尽くそうって決めたの。だからあなたも、ベストを尽くしてよ。お願い・・・』

ミーナ 『アニタ・・・私、あなたを誤解してた・・・今まで・・・ごめんなさい！』

ドラマ「カット！すごいわ、プリンセス、あなた天」

プリンセス「謝らないで！あなたがいたから頑張れたの。私一人じゃきつと・・・」

ジェット「・・・プリンセス？お芝居はもう」

プリンセス「だから言わせて！あなたに出会えて本当に良かった！あなたは私の大切な友達よ！ありがとう！MY BEST FRIEND！」

ドラマ「・・・終わった？」

プリンセス「わ、いけない！またやっちゃった！」

ジェット「また？」

プリンセス「ええ（クスツ）、私、妄想がとまらなくなっちゃう事があるの。ジャズなんかいつも困ってるわ」

ドラマ「だけど、続きのセリフ良かったわ。使わせてもらっていいかしら？」

プリンセス「えー！はずかしい！・・・けど嬉しいわ。どうぞ、使ってください」
ドラマ「ありがとう、プリンセス」

そこにセレブが帰ってくる。

ドラマ「あ、セレブ、おかえり」

セレブ「ふん、お芝居ごっこ？ずいぶん暇なのね」

ジェット「関係ないでしょ、あんたには」

セレブ「たしか、ジェットって言ったわよね？」

ジェット「ええ。なにか文句でもあるの？」

セレブ「文句じゃないわ、提案よ」

ジェット「提案？いったい何の」

セレブ「私今度、ミュージカルの出演が決まりそうなの」

ジェット「へえ、それが？」

セレブ「劇中の音楽の生演奏で、ギタリストを探してるのよ」

ジェット「なんであんたがそんなことを」

セレブ「パパの会社が絡んでるのよ。それでいい人いませんかって、プロデューサー交えた食事会で相談されたの。どう？推薦してあげてもいいけど、やってみる気ある？」

ジェット「ミュージカルのギタリスト・・・」

セレブ「別にどっちでもいいけど、条件があるわ」

ジェット「条件？」

セレブ「ええ。今後、私が呼んだらすぐに部屋に来て。それと他の子たちとは付き合わないこと。いい？それが条件よ」

ジェット「ふざけないでよ。何よ、その条件は」

セレブ「嫌ならいいわ。いつまでもそうやって部屋の隅っこで、鳴らないギターいじくってなさいよ」

ジェット「なんですって・・・」

セレブ「パパは友達を連れてきていいって言ってたけど、肩書は何でもいいわ。友達でも、召使でも何でもね。返事は明日の朝までよ。じゃ」

ジェット「・・・ねえ」

セレブ「なに？」

ジェット「本当にステージで演奏を・・・」

セレブ「あなた次第よ」

自室に戻るセレブ。

ドラマ「ジェット・・・」

ジェット「・・・ちよつと出て来る」

出ていくジェット。

そこに帰ってくるエマとサンバ、バラード、レインボー、そしてジャズ。

サンバ「あれ？ジェット、どうしたの？なんか様子がおかしかったけど」

ドラマ「それが・・・」

プリンセス「やればいいのに」

バラード「・・・何をやればいいの？プリンセス」

プリンセス「夢よ。夢をかなえるためには、少しぐらい嫌な事も乗り越えなきゃ」

ジャズ「・・・帰るわよ、プリンセス」

プリンセス「ええ、わかったわ、ジャズ。みんな、さようなら。また」

ドラマ「ええ、プリンセス。気を付けて」

ジャズ「じゃあ、お疲れ様」

エマ・サンバ・バラード・レインボー「お疲れ様でした」

エマ「何があったの？」

ドラマ「実はね・・・」

■第五幕

ミュージカルのリハーサル室。

ギターを弾くジェット。

ナンバーを歌うセレブ。

M 『もう二度と』

音楽プロデューサー声「良かったよ、セレブ。じゃあ、少し休憩にしよう」

セレブ「はい・・・(ジェットに)どう？調子は」

ジェット「ええ・・・何とかね」

セレブ「せっかくこんなすごいチャンスあげたんだから、もっと感謝してよ」

ジェット「・・・感謝はしてる、セレブ。だけど・・・」

セレブ「だけど何よ。不満でもあるの？」

ジェット「ううん、不満なんてないけど・・・あまり得意なジャンルじゃないから、少し戸惑っちゃって・・・」

セレブ「馬鹿じゃないの？好きな音楽だけやりたいならアマチュアでいなさいよ。ギターリストなんていくらだっているんだから」

ジェット「そうよね・・・分かってるんだけど・・・」

セレブ「ねえ、ジェット」

ジェット「なに？」

セレブ「私は自分の夢をかなえるためなら何だって使う。こうやってここにいるのだってパパの力のお蔭だって分かってるわ」

ジェット「あんた・・・」

セレブ「だからいつか見返してやりたいの。私をただの親の七光りだって、陰で馬鹿にしてる奴らを」

ジェット「・・・強いよね」

セレブ「強くなきゃやっていけない。そういう世界だって、分かってるんでしょ？」

ジャント「分かってる・・・つもりだけだったのかな」

セレブ「じゃあ今から頑張るなさいよ。私に恥かせないで。頼むわよ」

ジェット「・・・分かったわ、セレブ」

音楽プロデューサー声「それじゃあ、再開しよう」

少しだけ微笑み、スタンバイするセレブ。

夜。Auditionのフレンズルーム。

エマ、サンバ、バラード、レインボーがくつろいでいる。

そこに、ドラマがあわてた様子で帰ってくる。

ドラマ「聞いて聞いて！」

エマ「どうしたの、ドラマ？そんなにあわてて」

ドラマ「それがね、決まったの！」

レインボー「決まったって何が？」

ドラマ「脚本コンテストよ！私の作品がグランプリに決まったの！」

みんな「えー！」

バラード「すごいじゃない！やったわね、ドラマ！」

ドラマ「ありがとう！嬉しい・・・やったー！」

エマ「これは私たちも負けていられないわね！」

ドラマ「そうよ！ここは夢がかなう家、Auditionだもの！」

レインボー「よし、私も食べるぞー！」

サンバ「食べる？何を？」

レインボー「火よ、火！」

サンバ「火？」

レインボー「松明にガソリンしみこませて火をつけるの。それを口に頬張って火を消す、すごい技あるでしょ？あれよ、あれ」

サンバ「へー・・・」

レインボー「へーて何よ、大道芸馬鹿にしてる？」

サンバ「してないしてない！」

エマ「ところでグランプリになるとどうなるの？」

ドラマ「それがね、驚かないですよ、ブロンズウエイの舞台上で上演されるんですって！」

エマ「本当にー！？すごい、私それに出たいなあ。タイトルは？主役はなんていうの役なの？」

ドラマ「落ち着いてよ、エマ。えへへ、タイトルはね、君がくれた約束」っていうの。主役の名前はアニタ」

エマ「えー、アニタか・・・いい名前ね」

ドラマ「ありがとう。この時のために一生懸命書いたんだ」

エマ「知ってる。夜遅くに、レストランのバイトが終わって帰ってくると、ドラマの部屋にだけいつも灯りがついてた。あー、まだ頑張ってるんだなあと思うと、疲れて眠たいけど、もうちょっとだけ頑張ろうって思える。自分は何のためにここに来たんだって思い出させてくれるの」

ドラマ「そっか。私の夜更かしも少しは役に立ってたのね」

エマ「あははは。おめでとう、ドラマ。私も嬉しい」

サンバ「私も」

レインボー「私も」

バラード「よかったわね、ドラマ」

ドラマ「ありがとう、みんな」

エマ「けどどいつか本当に、ドラマが書いた脚本でお芝居が出来たらいいのにな」

ドラマ「そうね、本当に」

サンバ「やればいいじゃない」

エマ「そうか・・・そうよね！？やればいいのよね」

バラード「いいわね、やりましょうよ。私には歌わせて」

レインボー「私もオープニングアクトでも何でもやって盛り上げるわ！」

サンバ「あー、踊ってみたい！ドラマの作ったお話の中で」

ドラマ「それならやっぱりミュージカルよね」

エマ「約束しましょうよ、いつか必ずやるって。本当にやるって！」

ドラマ「ええ！約束しましょう、Auditionのみんなで、いつか！」

サンバ「うん！」

みんな「いつか！」

そこにヘルプがやってくる。

ヘルプ「あら、なんだか楽しそうね」

エマ「ヘルプさん、こんばんは！どうしたの？こんな時間に」

ヘルプ「それがね、毎週楽しみにしてる番組を見ようと思ったら、うちのテレビ、急に調子が悪くなっちゃって、あわてて来たんだけど？いい？今晚だけ」

サンバ「もちろん、大歓迎です」

ヘルプ「良かった。けど何をそんなに盛り上がったの？」

エマ「いつかみんなで、ドラマが書いた脚本でお芝居をやるうって。そう約束したの。ね？」

ドラマ「ヘルプさん、脚本コンテストで私、グランプリに選ばれたのよ！」

ヘルプ「え！？本当に！まあ、あなたついにやったのね！良かったー！嬉しいわね、うちに来て2年？3年？ほらやっぱり、Auditionの魔法は健在よ！みんなもすっかりね！・・・っと、テレビのリモコン貸して」

みんな「えー！？」

ドラマ「ははは・・・」

テレビを見始めるヘルプ。

ヘルプ「ほら、これ、これよ。面白いのよ、毎週見ちゃう」

突然、臨時ニュースが流れる。

ヘルプ「ちょっと、何よ、何のニュース？・・・うん？」

臨時ニュースの声「臨時ニュースです。今夜、実業家のサザビー・ゴールド氏率いる、サザビー・ゴールド社が多額の負債を抱え倒産しました。負債総額は世界最高額を記録しました。繰り返します、先ほど、サザビー・ゴールド社が倒産しました・・・」
バラード「サザビー・ゴールド社って、もしかしてセレブの？」
ヘルプ「・・・ええ、そうね・・・なんてことかしら・・・」

そこにセレブが帰ってくる。

エマ「セレブ！」

セレブ「・・・なに？」

エマ「ううん・・・別に・・・」

セレブ「何よ、用がないなら行くわよ・・・どいて」

ヘルプ「セレブ・・・大丈夫？」

セレブ「大丈夫？どういう意味？ヘルプさん・・・家賃ならきちんと払うから心配しないで。おやすみ」

ヘルプ「・・・おやすみ」

ドアを閉める大きな音。

部屋のを壁に投げつける音と叫び声。

徐々に大きくなるセレブの泣き声。

■第六幕

フレンズルーム。

台本を持っているエマとセレブ。

そしてそばに座っているプリンセス。

芝居の練習をしている。

セレブ「違う違う、そうじゃない、うーん、なんていうんだろう・・・もっと自然にやればいい気がする、もつと肩の力を抜いて」

エマ「・・・こう？（肩の力を抜く）」

セレブ「やだ（笑）、あはははは、面白い人（笑）」

エマ「ねえ、笑わないでちゃんと教えてよ、オーディション明日なんだから」

プリンセス「今度はどんなオーディションなの？」

エマ「明日のはね、アクションもあるファンタジーでね、なんと海賊の話なの。歌も踊りもあって絶対やってみたいんだ」

プリンセス「どんな役がやりたいの？」

エマ「それはヒロインをやってみたいけど、何でもいい、ううん、どんな役でも精一杯やるつもり」

セレブ「あなたあんまり、ヒロインって感じじゃないんだけど、クスッ」

エマ「あ、また笑った！そりゃ私はセレブみたいに綺麗でも上手くもないけど・・・どうしても叶えたい夢があるから」

プリンセス「どうしても叶えたい夢？」

エマ「そう。私、たくさんの人を笑顔にしたいの。今日どんなに嫌な事があっても、私のお芝居見て、ああ、また明日も頑張ろうって思ってもらえる、そんな女優になりたい。それが私がこの仕事を選んだ理由。今はそう思えるんだ」

セレブ「相変わらず甘いわね」

プリンセス「セレブ・・・」

セレブ「でも、少しは成長したんじゃない？」

エマ「本当！？」

セレブ「すぐ調子に乗る」

エマ「いけない(笑)」

セレブ「頑張ってるね。私の分まで」

エマ「え？私の分って・・・どういう意味？・・・まさか」

セレブ「うん、やめる」

エマ「うそ！？お芝居やめちゃうの？どうして！？お父さんの会社がつぶれちゃったから？だからやめちゃうの！？そんなセレブには関係ないじゃない！駄目だよ、セレブ、そんなことで好きなお芝居やめちゃいけないよ、駄目だよ、セレブ・・・やめないで！」

セレブ「好きじゃないの」

エマ「・・・え？」

セレブ「好きじゃないことに気が付いたの。わたしはただ・・・多分、自分の置かれた立場に反抗したかっただけなんだって気が付いたの」

エマ「でもそれは」

セレブ「贅沢だって分かってる！・・・だけどやっとこれで、自分の足で歩いて行ける」

エマ「セレブ・・・」

セレブ「大丈夫よ、心配しないで。生きていればなんとかなる。今度こそ自分一人の力で」

ジェットが出かけて行くこうとする。

ジェット「・・・」

セレブ「ジェット」

ジェット「・・・大変そうね、お父さんの会社・・・」

セレブ「私には関係ないわ。毎日テレビでパパの事を色々悪く言ってるけど、私には関係ない、パパは。パパよ」

ジェット「・・・あなたが役を降ろされちゃって、私、なんて言ったらいいか・・・」

セレブ「いいのよ、気にしないで。どう？上手くいってる？」

ジェット「ええ。音楽プロデューサーには気に入ってもらったみたいで、次回作のオフアームもいただいで・・・ごめんなさい、私だけ・・・」

セレブ「馬鹿ね。おめでどう」

ジェット「え？・・・」

セレブ「おめでどうって言ったのよ。祝福する、友達として」

ジェット「セレブ・・・ありがとう・・・じゃあ、私、リハーサルがあるから」

エマ「行ってらっしゃい」

ジェット「行ってきます」

出て行くこうとするジェット。

そこにふらついたドラマが帰ってくる。

ジェット「ドラマ？・・・大丈夫？ドラマ・・・」

膝をつくドラマ。

ジェット「ドラマ！」

エマ「どうしたの！？ドラマ、何かあったの？」

ドラマ（首を振り）嘘よ、そんなことしてない・・・」

セレブ「何？何て言ったの？」

話しながら部屋から出て来るサンバとレインボー。

サンバ「どうしたの！？」

ドラマ「私が盗作したって・・・私の作品が盗作だっていうの・・・してない・・・私、盗作なんてしてない！（泣）」

エマ「どういう事？誰がそんなこと・・・」

バラードが息せき切って帰ってくる。

バラード「良かった、帰ってたのね・・・」

ジェット「どういうこと？何か知ってるの？」

バラード「・・・2時間くらい前に、脚本コンテストの審査会から電話が来たのよ」

エマ「何の？」

バラード「・・・ドラマのグランプリを・・・取り消すって」

ジェット「なんですすって！？」

エマ「どうしてそんなことに・・・」

バラード「なんでも、セリフの一部分がある作品とそっくりで・・・ううん、確認したらまったく同じだったの・・・」

サンバ「そんなことってあるのかなあ？」

レインボー「そうよね、ドラマが盗作なんてするわけがないだし・・・」

バラード「電話の後、出かけようとしたドラマの様子心配で、私、一緒に話を聞きに行ったの。それで見せてもらったら・・・（原稿を出す）」

エマ「どれ？どこが同じなの？」

バラード「ここよ、この赤線が引かれた部分」

エマ「・・・謝らないで、あなたがいたから頑張れたの。私一人じゃきつと・・・だから言

わせて、あなたに出会えて本当に良かった、あなたは私の大切な友達よ、ありがとう、MY BEST FRIEND・・・これ？」

バラード「(うなづく)・・・」

ジェット「これって・・・もしかして・・・」

レインボー「何？ジェット、あなた何か知ってるの？」

ジェット「・・・」

プリンセス「・・・私だわ・・・私がドラマの脚本に、勝手に付け加えて言ったセリフよ・・・謝らないで、あなたがいたから頑張れたの。私一人じゃきつと・・・だから言わせて、あなたに出会えて本当に良かった、あなたは私の大切な友達よ、ありがとう、MY BEST FRIEND・・・」

エマ「これがどうして盗作なの？プリンセスが言ったんだとしても、それは別に盗作なんかじゃ」

ドラマ「MY BEST FRIEND・・・」

エマ「・・・え？」

ドラマ「MY BEST FRIENDっていう有名な作品があるの・・・その中の一説が全く同じセリフで・・・馬鹿よね、私・・・ちゃんと確かめしないで・・・お芝居好きのプリンセスが、大好きなセリフの一部を思わず言っちゃったのね・・・駄目だなあ、最低・・・気が付かないなんて、だから全然デビューできなかったのよね・・・馬鹿みたい・・・馬鹿みたい！」

エマ「ドラマ！」

走って部屋に戻るドラマ。

エマ「・・・」

プリンセス「イヤー！！イヤー！！(暴れ出す)」

ジェット「どうしたの！？プリンセス！みんな押さえて！プリンセス、落ち着いて、プリンセス！」

プリンセス「ごめんなさい！ごめんなさい！許して！ごめんなさい！イヤー！・・・ごめんなさい・・・」

ジェット「大丈夫・・・大丈夫よ・・・あなたのせいじゃない・・・大丈夫よ・・・」

バラード「・・・ドラマの様子見てくる」

ジェット「お願い・・・」

■第七幕

ダンススタジオ。

月一回のジャズのレッスン日。

レッスンを受けるサンバとエマ。

ジャズ「それじゃ今日はここまでにしましょ」

サンバ「はい・・・」

ジャズ「ねえ・・・」

エマ「はい・・・」

ジャズ「プリンセスの事・・・妹が・・・ごめんさい」

エマ「いいえ、ジャズのせいじゃないから」

ジャズ「ドラマは？」

エマ「なんとかね・・・大丈夫、ドラマなら心配ない。私たちがついてるから」

ジャズ「そうね・・・」

出ていくジャズ。

サンバ「エマ・・・」

エマ「何？サンバ」

サンバ「あのさ・・・お金貸してくれない？」

エマ「お金？いったい何に使うの？」

サンバ「・・・やっぱいいわ・・・ごめん、忘れて」

エマ「話してよ。そうじゃなきゃ協力のしようもないじゃない」

サンバ「いいの、本当に・・・先に帰ってて、私、行くところあるから、じゃ(出ていく)」

エマ「あ、サンバ・・・(ため息)」

フレンズルーム。

先に帰ってくるエマ。

各々でくつろぐバラードとレインボー

エマ「ただいまあ」

バラード「おかえり・・・あれ？一人？サンバは？」

エマ「さあ・・・先に帰ってって、行くところあるからって」

バラード「どこ行ったんだろ、レインボー、知ってる？」

レインボー「知らない。デートかなんかじゃないの？」

エマ「そんな感じじゃなかったな、なんだか憂鬱そうで」

バラード「たしかに朝も様子変だった。コーヒーしか飲まなかったし」

エマ「それに・・・」

レインボー「何？」

エマ「お金貸して欲しいって・・・」

レインボー「お金？何に使うの？」

エマ「知らない。聞いても教えてくれなかった・・・」

バラード「・・・実は私も・・・言われたんだよね、お金貸してって」

エマ「そうなの？」

レインボー「なんで私には言わないの？」

バラード「さあね・・・私も理由聞いたんだけど、黙りこんじゃって、それきり」

エマ「なんか最近・・・みんな変だよ」

バラード「まあ確かに、あれ以来、なんか暗いもんね、Audition」

レインボー「そうなの！私、けっこうこの状況つらい・・・どうしたらいいんだろ？」

エマ「わかんない・・・そうだ、パーティでもやろうか？プリンセスも呼んでさ。あれから一度も来てないじゃない、プリンセス。このままじゃ、プリンセスもドラマも可哀そうよ。私たちが何とかしなくちゃ、そうでしょ？バラード」

バラード「確かにね。セレブも出て行っちゃったし、自分たちだっていつまで一緒にいられるか分からないだから、このままじゃ折角の時間ももったいないもんね」

レインボー「なんか今のセリフ、急激に切なくなるんですけど（シクシク）」

エマ「ほらほら泣いてないで、そうと決まったら準備はじめよう」

バラード「オッケー」

レインボー「じゃあ私、買い物行ってくる」

エマ「じゃあ私は部屋の片付けと飾り付け」

バラード「それでは久しぶりに腕を振りますか！？何食べたい？」

エマ・レインボー「んー・・・あ、ピザ！」

M 『We Love Pizza!』

フレンズルームでのパーティー。

エマ「それでは始めたいと思います！サンバがまだですが、そのうち帰ってくるでしょう。ではまず、今日のパーティーの主催者、レインボーから一言！」

レインボー「えー、聞いてない！・・・んーと、本日はお日柄もよく」

ヘルプ「来る時、小雨振ってたわよ」

一同「(笑)」

レインボー「いいの、細かいことは・・・特に何でもない日なんですけど、久しぶりにみんなでピザでも食べながら話したいねってことで、楽しみましょう！カンパー」

エマ「だめだめ、あんたは挨拶だけ！乾杯はヘルプさんよ、言ったでしょ？ヘルプさんお願いします！」

ヘルプ「ははは、私？それじゃ、ドラマ、顔を見せて」

ドラマ「(顔を上げる)・・・」

ヘルプ「(うなずき)、プリンセス、ようこそ」

プリンセス「・・・お招き、ありがとうございます」

ヘルプ「水臭いわね、お招きだなんて。でもいいわ、久しぶりにみんな揃ったんだし、楽しくやりましょう。では、カンパー」

ドラマ「待って!・・・ちよつと待って・・・」

ヘルプ「どうしたの?ドラマ」

ドラマ「少しだけ話をさせてください・・・」

ヘルプ「いいわよ。どうぞ」

ドラマ「ありがとうございます・・・今日はこんなパーティーを開いてくれて、バラード、レインボー、そしてエマ、本当にありがとうございます・・・私の為だっすぐにわかったけど、なんだかまだ気が重くて、それに少し照れくさくて・・・来てくれて良かった、プリンセス・・・」

ジャズ「・・・ほら(プリンセスを立たせ、背中を軽く押す)」

プリンセス「・・・」

ドラマ「・・・ごめんね、プリンセス・・・あなたは何にも悪くないのよ。ちよつと、私がドジっただけ・・・つらかったでしょ?・・・分かってるのに、すぐにあなたを許す気持ちになれなかった・・・だけど、こうしてみんなが仲直りのきっかけを作ってくれたわ。また一緒に、台本読むの手伝ってくれる?プリンセス」

プリンセス「(泣)・・・ごめんなさい、ドラマ・・・(泣)」

ドラマ「(プリンセスに駆け寄り抱きしめる)謝らないで、大好きよ、プリンセス」

プリンセス「(泣)・・・私も大好きよ、ドラマ!・・・(泣)」

ジャズ「ありがとうございます、ドラマ・・・」

ヘルプ「さ、乾杯の続きよ、おいしいピザが冷めちゃうわ。では改めて、カンパーイ!」
みんな「カンパーイ!」

食事を始めるみんな。楽しい宴。

そこにサンバが帰ってくる。

エマ「あ、サンバ、お帰り!遅かったじゃない、どこ行ってたの?今日ね、ご覧通り、急遽パーティーなの、ピザパーティー、好きでしょ?ピザ・・・サンバ?」

サンバ「ごめん、食欲ないの・・・部屋行っていい?なんだか疲れちゃって・・・ごめん」

エマ「あ、サンバ・・・」

ジェット「サンバ、何だって?」

エマ「(首を振り)調子悪いみたい」

ジェット「・・・あの子、お金貸してって言ってきたの。何かあったのかしら?」

エマ「ジェットにも?」

サンバの部屋。

毛布にくるまり震えるサンバ。

サンバ「どうしよう・・・どうしよう・・・(お腹をさする) どうしよう・・・」

電話が鳴り、電話に出るサンバ。

サンバ「もしもし・・・あ、よかった・・・全然電話くれないからどうしようかと思ってたんです・・・え？なに？何て言ったの？・・・別れようって、そんな・・・ひどい・・・待ってください！聞いてください！・・・お腹に赤ちゃんが・・・待って、切らないで！・・・そんな・・・私、そんな女じゃありません！お腹の子はたしかにあなたの・・・ねえ、ちよつと、ねえ、ねえ、もしもし？ねえ！ねえったら！・・・どうしよう・・・どうしたらいいの・・・どうしたら・・・」

夜の街をさまようサンバ。

クラクションと車の騒音。

ふらついて車道に飛び出すサンバ。

タイヤのスリップ音と大きな衝撃音。

遠くから聞こえてくる救急車両の音。

よく晴れた日の墓地。

黒い服を着た Audition の住人達とヘルプにジャズ姉妹。

そして駆け付けたセレブ。

ジェット「馬鹿よね・・・どうして言ってくれなかったの・・・」

バラード「気が付かなかった・・・妊娠してたなんて・・・」

ドラマ「相手の男性は有名なプロデューサーらしいわ・・・仕事を餌に騙された女の子がいっぱいいるって・・・ひどいやつ・・・」

レインボー「あんなにずっと一緒にいたのに、何も知らなかったなんて・・・本当は私たち・・・バラバラだったのかな・・・」

ヘルプ「いい子だった・・・明るくて優しくて・・・」

セレブ「・・・自分が目指してるものが、本当に好きな事なのかどうかも分からなくなる・・・仕事を得ることが目的になって、自分を見失ってしまう・・・」

ジェット「やればやるほど見えなくなっ、追えば追うほど遠くなってしまう・・・夢ってなんなのかしらね・・・セレブ、私、ミュージカルのギターやめるわ。私が弾きたかったギターじゃないから。ごめんね」

セレブ「私には関係ないわ。好きにきなさいよ、あなたの人生でしょ？」

ジェット「そうね・・・新しいバンドメンバーとツアーに出ることになったの」

セレブ「いいわね。あなたらしい」

バラード「ヘルプさん、私、Auditionを出ます。誰も知らない場所で一から頑張ってみたいの」

ヘルプ「そう・・・わかったわ」

バラード「このままだと、みんなに甘えちゃいそうで・・・ごめんなさい」

ヘルプ「いいのよ。頑張って」

ドラマ「ヘルプさん、私も・・・故郷に帰ります。父も母も年をとって、そばにいて欲しいって。だけど、脚本は書き続けるわ。どこにいたって、どんな時だって、ペンとノートがあれば私は頑張れる。だからみんな、今までありがとう・・・それから、さよ」

エマ「待って。さよならを言う前に、一度だけやってみない？」

レインボー「・・・やってみる？」

エマ「うん。みんなで約束したよね。ドラマの書いた脚本をみんなで作ってみようって。演じて、踊って、歌って、いつかミュージカルにしようって。ね？やろうよ、サンバの為に」

ジェット「・・・サンバの為か・・・うん、やろう。みんなのこれからのためにも」

バラード「そうね、やりましょう、私たちだけの舞台を」

レインボー「やろうやろう！このまま終わったら歩き出せないよ！歩き出せない・・・」

ドラマ「そうよね、やらなきゃいけないわね。プリンセス、あなたも出るのよ」

プリンセス「え？・・・分かったわ！ドラマ」

ジャズ「振りつけは私にやらせてね」

エマ「もちろんよ、ジャズ！ドラマ、演目は？」

ドラマ「君がくれた約束！」

■第八幕

観客のいないステージ。

照明がともり、歌い踊り始めるメンバーたち。

M 『君がくれた約束』

芝居シーン アニタ・エマ ミーナ・プリンセス

アニタ『早く逃げなくちゃ！さ、ミーナ、急いで！』

ミーナ『手を放して！私なんてもうどうなってもいい！』

アニタ『ミーナ・・・』

ミーナ『いい気味でしょ？私はもう終わりよ！私のことなんてみんなとっくに忘れてる！』
アニタ『馬鹿言わないで！ミーナ、いつも言ってたじゃない。私はベストを尽くしたいだけ』って。それを聞いて私も、今自分にできることにベストを尽くそうって決めたの。だからあなたも、ベストを尽くしてよ。お願い・・・』

ミーナ 『アニタ・・・私、あなたを誤解してた・・・今まで・・・ごめんなさい!』
アニタ 『もういいわ、ミーナ。だけど覚えておいて。自分の人生は自分だけのものよ。素晴らしい人生にするのも、そうじゃなく終わるのも自分次第。他の人なんて関係ないわ、誰が何を言ったって、あなたはあなた!あなた以外の人にもなれないし、なる必要もないの。だって、私はそのままのあなたが好きだから』

ミーナ 『アニタ・・・』

アニタ 『さ、行くわよ!』

サンバも一緒に歌って踊っている。

ステージが終わり、客席から一人、拍手を送るヘルプ。

徐々に増えてゆく拍手の音。

いつしか響きわたる大喝采。

A u d i t i o n のフレンズルーム。

掃除をするエマとレインボー。

レインボー 「さびしくなっちゃったわねー」

エマ 「私がいるじゃない」

レインボー 「それはそうなんだけど」

エマ 「ねえ、レインボー」

レインボー 「なあに?」

エマ 「・・・ううん、なんでもない」

レインボー 「なによ、気持ち悪いわね、いいなさい、こら、エマったら、待ちなさいよ」

エマ 「何でもないってば、あははは、やめて、くすぐらないで」

チャイムが鳴る。

エマ 「あ!きつとヘルプさんが言ってた新しい人よ」

レインボー 「やったー!」

エマ・レインボー 「ようこそ!A u d i t i o n へ!」

M 『A u d i t i o n 』